

# 青丘文庫研究会 月報 No.249

2011年1月1日

青丘文庫研究会 〒657-0064 神戸市灘区山田町 3-1-1 (財)神戸学生青年センター内  
TEL 078-851-2760 FAX 078-821-5878 <http://ksyc.jp/sb/> e-mail hida@ksyc.jp  
①在日朝鮮人運動史研究会関西西部会 (代表・飛田雄一)  
②朝鮮近現代史研究会 (代表・水野直樹)  
郵便振替<00970-0-68837 青丘文庫月報>年間購読料3000円  
※ 他に、青丘文庫に寄付する図書の購入費として2000円/年をお願いします。



新年あけましておめでとうございます。  
本年もよろしくお祈りします。

2011年正月

朝鮮近現代史研究会代表 水野直樹  
在日朝鮮人運動史研究会関西西部会代表 飛田雄一

## <巻頭エッセイ>

### 私と朝鮮、青丘文庫とのおつきあい 梶居佳広

2011年正月の冒頭エッセイを私が担当することになるとは、正直(12月13日まで)夢にも思わなかった。というか、青丘文庫に私に関わること自体(既に3回ほど報告しましたが)偶然の積み重ねのように思えるのだ。以下、私と韓国・朝鮮との関わりについて簡単に振り返ることにしたい。

私は「天皇、天安門、ベルリンの壁」の3点セットに触発され文学部西洋史に入学したが、当時朝鮮関連科目がなかったこともあって韓国・朝鮮に関心をもつことはなかった。ただ同期の韓国からの留学生が「日本が再び攻めてくるかもしれない」と真剣に心配していたことだけは今でも記憶している(彼女の心配をどう受けとめるべきだったか?)。文学部卒業後、公務員受験のため法学部に学士入学し、そこで初めて朝鮮史(宋連玉先生)に触れたが、最初の授業で提示された問題(=朝鮮近現代で有名な10人を説明しなさい)に半分程度(金玉均、安重根、金日成、李承晩だったか?)しか説明できなかったことが一番印象に残った「出来事」であって特に熱心に聴講したわけでない。法学部卒論は東京裁判をとりあげ朝鮮人戦犯に関する内海愛子先生の著作も参照したがここでもさほど関心をもつことはなかった。どうもこのころは東アジアといえば中国しか念頭になく朝鮮は中国周辺の小国という豊臣秀吉程度(?)の認識しかなかったのかもしれない。

転機は大学院進学だった。いつの間にか公務員のことは忘れ卒論を深めるため大学院に進学したのだが、入るなり指導教授(赤澤史朗先生)から「法学研究科では“横文字”を使わなかったら論文として受理されないかもしれないよ」と指摘され研究テーマの変更を迫られた。立命には「横文字」としてGHQと英国外務省文書があったが、どうもアメリカが好きでなかった(厳密にはアメリカに媚びる日本が嫌いというべきだが)ので英文書を眺めているうちに、彼ら外交官が日本の植民地支配をどう観察していたかが面白くみえてきた。結果、修士・博士論文はこのテーマで書くことになり日本と朝鮮との関係についてもいろいろ勉強するようになった。そして2008年5月、もう一つの研究テーマである戦後憲法と新聞論説を調べるため神戸市立中央図書館を訪問した際、案内図に「青丘文庫」と書いてあったので「須磨にあったのでは?」と思いつつ、4階に顔を出したのが青丘文庫とのお付き合いのきっかけであり、今こうしてエッセイを書く破目にもなったのだった。

私は朝鮮史の専門家ではないしハングルも99%（100%ではないが）理解できない。ただ最近気づいたことだが、私は朝鮮関係研究会への出席率が（病欠も多いが）意外に高く、日本史や日本政治関係に比べ居心地がよいと感じているようなのだ。この点「分析」すると、私は文学部と法学部、歴史と政治の間を徘徊する「イソップ物語の蝙蝠」のような存在で、また昔から一定の距離をとってテーマに接することを好む傾向があった。韓国・朝鮮は主専攻でないがゆえにおつきあいしやすいと感じるのかもしれない。

ということで、何とかエッセイを書くことができました。2011年もあまりよい展望が開けるようには思えませんが、「人の振り見て我が振り直せ」の精神で日本の「過去」、朝鮮との関わりを調べていきたいと思っています。



## 第276回朝鮮近現代史研究会（2010.10.10）

### ソウル駐在英領事館の朝鮮報告－1930年代を中心に

梶居佳広

日本による韓国保護国化・併合を容認したイギリスは、以降1943年カイロ宣言まで日本の朝鮮支配を黙認していた。その間イギリスは日本の支配をどう観察していたか。本報告では特に先行研究が乏しいワシントン会議（1921-22年）以降のイギリス外交官の評価について、ソウル駐在の総領事報告を紹介した。但し報告者の都合により、今回は1928年のホワイト（O.White）からアジア太平洋戦争勃発までの3人の総領事に限定している。

まず3人の総領事それぞれの報告を整理すると、いわゆる「文化政治」期の総領事であったホワイト（1928-30年）は、3人の総領事の中でも最も日本の支配を肯定的に評価していた。もっとも、当初から教育や経済問題、危険思想という「3大問題」があるとし、1929年光州学生運動勃発以降、日本支配の問題点をより強調するようになっている。共産主義運動や国境問題についても紹介しているが、彼によると「同化」政策をやめ朝鮮を大英帝国下のオーストラリアやカナダのような「ドミニオン」の地位に据えることが望ましいとしている。

1919年の3・1独立運動を目撃していたことでも知られるロイズ（W.M.Royds、1931-33年）は、（ホワイトと同様）日本支配による物質的進歩を評価したが、支配全般についてはより冷めた見方を示していた。特に宇垣総督の下、ロイズが最も関心をもっていた欧米人宣教師による諸活動（医療・教育）への統制が強化されたと感じるとその傾向は強まった。

1934年末から総領事となったフィップス（G.H.Phipps、1935-41年）はロイズと異なり宇垣総督には一定の評価を与えたが、南総督が就任すると（日英関係の悪化もあって）一変する。すなわち、南による神社参拝（＝キリスト教徒圧迫）や「内鮮一体」「同化」に対して西欧の植民地政策から逸脱しナチスの影響をも受けた国家主義的・軍国主義的政策と酷評するのであった。

3人の総領事は、日本の支配によって朝鮮は「発展」がみられると理解する一方で日本当局が進める「同化」に否定的であった点、一致していた。ただし「発展」について、ホワイトは日本支配が朝鮮の「西洋化」をもたらしたとみるのに対し、宣教師主導の近代化を理想視するロイズは「日本式」と「西洋化」は異なるとし、フィップスはさらに西洋と日本との間の差異を強調していた。「同化」については、ホワイトの場合、「同化」を法的・制度的側面から理解して、ゆえに日本のいう「同化」は内実が伴っていないと批判したが、フィップスの場合は宗教や教育における「日本」なるものの押し付けを「同化」と理解していた。

なお被支配者である朝鮮人への評価になると、日本支配への評価とある程度一致する点、3人の総領事の報告は共通していた。すなわちホワイトは朝鮮の若年層は「西洋化」され今後に期待が持てるものに対して、ロイズは日本人に比べ朝鮮人は「能力開発」の点で後れをとっている（ゆえにロイズは日本の「同化」は無駄であり、また宣教師による朝鮮人の覚醒を説いている）といい、フィップスの報告になると朝鮮人の存在自体が希薄になるのであった。こうした理解は、総領事は宣教師からの情報を除くと専ら

日本語情報に依拠して報告をまとめたことに起因するように考えられる。

以上3人の報告は、朝鮮半島へのイギリス本国の関心が低いこともあってイギリス外交政策への影響については極めて限定的なものに止まった。ただし大戦勃発後の東アジア戦後構想に関するイギリス外務省内の議論においてこれらの報告は参考資料の役割を果たした。また「物質的進歩と過酷な同化」というイギリス領事の評価は、現在に至るまで欧米における日本の朝鮮支配イメージの一典型といえるかもしれない。

#### 在日朝鮮人運動史研究会関西支部・第323回例会（2010.11.14）

### 「洛北松ヶ崎の近代と朝鮮人労働者」

高野昭雄

京都市北部郊外の松ヶ崎地区は、五山の送り火「松ヶ崎妙法」で知られている。平安遷都以来、朝廷への上納米を作る松ヶ崎百人衆は、明治に至るまで分家が許されず、その結束を守ってきた。鎌倉時代末期に一村あげて天台宗から日蓮宗に改宗し、比叡山に近いことから天文法華の乱では一番に血祭りにあげられた。こういった出来事が、村の結束を強めてきたのである。1931年の『京都日出新聞』には、「つひ十年程前迄は百戸内外の戸数に少しの異動もなく、全く生え抜きの村民だけが和合協力もとに泰平を謳歌してゐたものだ」と記されている。

このため、大正期になっても、松ヶ崎に工場が建つという光景は殆ど見られず、洛北友禅業が勃興していた東隣の修学院や、すぐき栽培に伴う屎尿汲取業や砂利採取業が盛んだった西隣の上賀茂に比べて、松ヶ崎の朝鮮人人口は少なかった（朝鮮人人口78人、松ヶ崎総人口の4.7%）。それでも第一次世界大戦がはじまると、大戦景気の中で、松ヶ崎では数少ない工場である東洋ラミー織布株式会社が操業をはじめ、「工女ノ集収容易ナラズ争奪盛ニ行ハレ」る状況の下、この工場にも朝鮮人が働いた。第一次世界大戦が終わると、戦後恐慌の中で、東洋ラミー織布株式会社は事業に行き詰まり、営業を終える。

松ヶ崎に、多くの朝鮮人が居住したのは、1924年にはじまる松ヶ崎浄水場工事からである（1927年完成）。五山の送り火で有名な妙法山（西山）の頂上に最高区配水池が設けられたが、当時の新聞記事によると、山腹の飯場には約50～70名の朝鮮人が居住していた。1920～30年代にかけての京都市では、市域の拡張に伴い人口が急増し（1920年：約59万人、1935年：約108万人）、蹴上浄水場につづく浄水場の新設が急務であった。その工事に朝鮮人労働者が従事していたのである。

なお、松ヶ崎浄水場の工事や、松ヶ崎高野川筋の砂利採取においては、朝鮮人と被差別部落住民が一緒に働いていたことも当時の新聞記事から分かっている。

松ヶ崎は京都市北部の中では、朝鮮人人口の少ない地域であったが、大戦景気時の労働力不足に伴う朝鮮人の流入、1920年代の都市社会基盤整備事業への朝鮮人の従事、また上水道工事や砂利採取業に被差別部落住民と共に朝鮮人が従事したことなどは、いずれも京都での典型事例であった（拙著『近代都市の形成と在日朝鮮人』人文書院、2009年、並びに拙稿「戦前期京都市西陣地区の朝鮮人労働者」世界人権問題研究センター『研究紀要』第14号、2009年3月）。京都の在日朝鮮人について語られる際、現在最大の朝鮮人集住地となっている東九条に関するものが多い。だが松ヶ崎のような朝鮮人人口が決して多くなかった地域の近代史にも、朝鮮人は様々な形で関わっていたのである。こういった歴史について、今後も調べていきたい。



#### むくげブックレット① 信長正義「東学農民革命戦争の遺跡地をたずねて」

A4、40頁、カラー、定価400円（送料80円）

※希望者は、郵便振替01120-5-46997 むくげの会または80円切手6枚をむくげの会までお送りください。

神戸学生青年センター・現代キリスト教セミナー

## 「日本で活躍した初期の朝鮮人女性伝道師」

●講師：聖和大学非常勤講師、在日大韓基督教会教育主事 呉 寿 恵（オ・スヘ）さん

戦前、植民地朝鮮から日本に留学した神学生は多く、朝鮮半島や日本で活発な伝道活動を行いました。その中には女性神学生がいて、彼女らのなかには卒業後も日本で活動をした伝道師もいます。呉さんは、今年、同志社大学神学部で「在日朝鮮基督教会の女性史研究」で博士号を取得されました。日本各地の神学校名簿等の調査から「朝鮮女性伝道師」の掘り起こしをされましたが、その論文から表記テーマでご講演をしていただきます。

●日 時：2011年2月25日（金）午後6時30分

●参加費：600円（学生300円）

●主催・会場：（財）神戸学生青年センター TEL 078-851-2760

## ●青丘文庫研究会のご案内●

■在日朝鮮人運動史研究会関西部会

※お休みです。

■第278回・朝鮮近現代史研究会

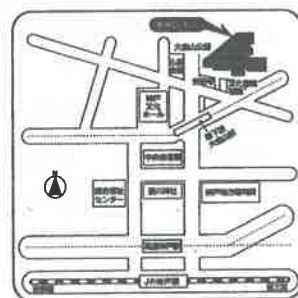
2011年1月9日（日）午後2時～4時

「朝鮮と日本の国策紙芝居」 鈴木常勝

●同日、午後4～5時

韓国の市民グループ「京畿市民社会フォーラム（李大洙牧師ほか）」との交流会、交流会はJR神戸駅前の和民へと続きます。

※会場 神戸市立中央図書館内 青丘文庫 TEL 078-371-3351



## 【今後の研究会の予定】

2011年2月13日（日）、在日（未定）、近現代史（李景珉）。研究会は基本的に毎月第2日曜日午後1～5時に開きます。報告希望者は、飛田または水野までご連絡ください。

## 【月報の巻頭エッセイの予定】

2月号以降は、高正子、斉藤正樹、坂本悠一、砂上昌一、高野昭雄、全淑美、塚崎昌之。よろしく願います。締め切りは前月の10日です。

## 【編集後記】



- ・ 新年をどのようにお迎えになられたでしょうか。2011年はいい年になるように願っています。
- ・ 本号よりB4版からA4版に変えました。だいぶ読みやすくなったでしょうか？
- ・ 新年早々のお詫びですが、前号の発行日、号数がまちがっていました。訂正をお願いします。ことしはノームスでいきましょう！！？
- ・ 1月の研究会では案内にあるように韓国の市民グループとの交流を開きます。ふるってご参加ください。飛田雄一（ひだ ゆういち、hida@ksyc.jp）